

常に新たな発想を

Never Stop Efforts of Seeking for More Advanced Business Models in the IT Era

南 正名
MINAMI Masana

日本は、ゴールデンウィークの最中で被害が少なかったとは言え、フィリピンで仕込まれたLove Letter ウィルスは、2日間で世界の数千万人に被害を及ぼし、被害総額は数千億円にも及びました。産業革命以上の大変革と言われるIT(情報技術)革命の威力です。社会秩序、国や企業の盛衰、人の人生設計シナリオを根本から変えねばならない変革の時代が到来したことをつくづく感じます。

1940年代から半世紀にわたる計算機やネットワーク技術の進化で、当初性能に比べ処理速度で5けた以上、記憶容量は6けた以上の向上が見られ、その価格も6けたあまり下がりました。通信帯域性能も5けた以上進化し、世界中をつなぐインターネットも生活インフラと見なしてよいほど広範に利用されています。

この間、当初もどかしかった情報処理速度、情報伝達速度がいつの間にか人の追いつけぬ速さに進歩し、今まで1年掛かった仕事が8時間で完了、数万円必要だった海外との交信も数十円です。「3けた違うと文化が変わる」と言われますが、これを上回る性能向上があったのですから、生活行動や社会活動の選択、テンポや質が変わるのは当然です。

一方、人が何げなくやっていることでも、今後、数十年たってもITだけでは置き換えられない仕事もあります。ITの進化で、発想力を増幅しながら仕事を進めるのが今後のあり方なのでしょう。鉄道事業も、昭和初期の先人経営者は事業拡大に際し、単なる砂利運搬や一次産業製品の輸送事業では採算がとれなくなることを見越して、住宅産業/百貨店/レジャーを組み合わせた顧客囲い込みのビジネスモデルを提案し、今日の隆盛につなげました。

環境が変わればビジネススタイルも変わります。IT時代には、そのスピード、範囲の広がり、コストの安さなどを生かしたビジネスモデルの提案があつてよいはずですが。この意味で、われわれは今、明治維新のころの人々と同様、大きな可能性を持っています。旧来のビジネススタイルにはまり込んだら負けです。IT時代には、常に走り続ける必要があります。鉄道事業のあり方を原点に戻って考えるために、事業の最終顧客である地域住民の生活や価値観の変化を知り、また、ニーズの実態を知る必要があります。先人も当時の社会環境、技術環境の下で、同様な頭の使い方をしたはずですが。新たな機会を生かす工夫をしたいものです。